

第1回北九州市立文学館展示リニューアル懇話会

【日 時】平成29年4月20日（木）14時00分～15時20分

【場 所】北九州市立文学館 ワークステーション

【出席者】植田構成員、江口構成員、加賀美構成員、近藤構成員、金構成員、まはら構成員（6名）

【事務局】後藤北九州市顧問、今川文学館長、今吉文芸担当課長、下元文芸担当係長、
岩村文学館事務局長、藤原企画係長

<1 自己紹介・北九州市立文学館の取組について>

〔植田構成員〕

- ・市内で、主婦をターゲットにしている生活情報誌を、30年以上にわたって発行している。最近、若い世代の方から「文字が多いと読みたくない」という声を多く聞く。若い世代の文字離れ、活字離れ。高齢の方からは「文字をもっと大きくしてくれ」と言われる。
- ・どういう形で、人々に「文字」というものに対して興味をもってもらおうとよいのか、考えながら仕事をしている。

〔江口構成員〕

- ・3月末まで公立中学校の校長をしていた。
- ・文学館には何度も足を運び満足しているが、もっと多くの人に知ってもらいたいため、国語教員を対象とした研修会は必ず文学館で行う。こんな素敵な所があることを、先生自身に知って欲しいし、生徒たちにも伝えて欲しい。

〔加賀美構成員〕

- ・友の会が設立されたときに、副会長を仰せつかった。
- ・友の会入会后、入場者数が非常に気になる。当初は、年間1万人ちょっとの入館者数であったが、ここ数年、倍増している。きっかけは「モンゴメリと花子の赤毛のアン展」か。朝の連ドラと重なり興味を引いた。アカデミックな文学館としての誇りもあるだろうが、文学館に人を引き寄せるための手段として、かなり重要なポイントか。

〔近藤構成員〕

- ・北九州市立大学副学長時代に、前館長の佐木先生に特任教授を依頼したことが文学館とのご縁の始まりである。
- ・開館から5年間の平均入館者数が12,124名、後半5年間で20,260名と7割くらい増えている。館内だけでなく、世の中の動きをどのように反映させるか。

〔金構成員〕

- ・働く女性を応援する情報誌を23年間発行している。北九州支社を立ち上げるため、15年前に来北した当時、北九州市民の「文化がない」「名物がない」など、ないづくめの発言に驚いた。いまや芸術劇場や文学館などができ、そのような発言はなくなった。
- ・市民にとって文化芸術は、シビックプライドの根幹となるもの。大事な存在なので、利用していない市民に広げたい。
- ・文学館について周囲の多くの女性たちがハードルの高さを感じている。そんな人達が文学館を利用してきて楽しめるようにできたらと思う。

〔まはら構成員〕

- ・子どもが主人公の物語を書いている。その大半が九州を舞台にしたもの。
- ・単行本デビューが2006年で、文学館と同年である。
- ・開館当初とずいぶん印象が変わった。「ブンガク最前線（平成27年度特別企画展）」の時に来館すると、本当に印象が変わっていた。来館者数も増加し、催し物も魅力的になり、北九州を離れている間に、こんなに立派になったんだということを感じた。

〔後藤顧問〕

- ・この10年で活字文化は随分変わった。
- ・書店では、純文学作品はものすごく有名な人の作品しか置かない。配架のほとんどは、サスペンスなど、売れるもの。文学館も入場者数だけを考えるなら、そのように迎合すればよい。しかし、文学館の使命は何か。文学館は文学を啓蒙していく使命と、牽引していく使命がある。

< 2 座長選出・座長挨拶 >

- ・北九州市文化振興計画の改訂に携わった。文学関係の施設として、新しい取組を2つあげている。1つは「子ども向けの展示の充実」。子どもたちは未来を担う、未来への投資ということ。もう1つは「周年行事の中で展示リニューアルを検討する」ということ。
- ・我がまちに対して、どういうプライドを持つかということは、その街を知って初めて生まれる。その中で、歴史的・時間的な部分、地理的・空間的な部分も含めて、文化、そして文学は非常に重要な要素である。

< 3 北九州市立文学館の課題 >

〔植田構成員〕

- ・常設展示の年表の文字が小さく、読みにくい。
- ・子どもや車いすの方の目線の高さを考慮する必要がある。
- ・展示内容が少し難しいが、「文学」という観点からすると、易し過ぎるのもどうか。
- ・パソコン打ちの原稿をどのように見せていくのか。その作家がどういう人物なのか伝わるような工夫が必要。

〔江口構成員〕

- 小中学生の頃に来館しなければ、大人になってもまず来ない。
- 小中学生向けの企画展は、家族連れにとっては、夏休みがよいが、(広報活動を考えると) 学校が休みのため、先生方からの周知が徹底されない部分もある。
- 教科書掲載の作家(中沢けい氏)が来校した際は大好評であった。教科書掲載の作家の企画展を開催し、学校単位で来館いただくと、ずい分違うのではないか。
- 訪日外国人が増加している。留学生なども多い。小倉城などにも観光客がたくさん来ている。東アジア文学などを取り入れてはいかがか。

〔加賀美構成員〕

- 見せる空間のみならず、参加する空間、多くの人が集える場所、面白いと思える空間作りが大切ではないかと思う。
- インターネット上では得られない情報が「あそこに行くと得られる」という何かが必要。
- 国際化について、観光施設のルートの一環とする場合、文学館のコンセプトの確認も必要。
- 障害者への配慮も必要。
- 文学館の認知度の問題が大きい。タクシー運転手も所在を知らない場合がある。看板以外にも物理的な周知方法の検討も必要。
- 展示方法については、既存のツールのみならず、新しい展示方法を少し工夫してみる必要もあるか。

〔金構成員〕

- 情報発信の強化が必要。
- 「文学」が付いているだけで高尚なイメージが先行して行きづらさを感じる人が多い。文学館の入口も入りにくい。
- 体験型ワークショップも必要。
- 近年、書店、図書館などが様変わりしている。本を読むだけだったのが、今は角打ちしながら本を読めたり、寝転んで本を読んだり、カフェ併設だったり、イノベーションがすごい。
- 既成概念を取り払って、リラックスして文学に触れられる空間作りや展示、体験企画を行えないか。文学館に来てもらって、文学に興味を持つという流れがあってもいいかと思う。
- 恋愛、推理小説、ホラーなども取り入れて、展示対象として面白く出来ないか。
- 来館しない理由のマーケティングも必要でないか
- 2Fの入館料の無料化。

〔まはら構成員〕

- かごしま近代文学館の隣にメルヘン館という名前で、子ども向けの施設が併設されている。名前をそういうふうに変えるだけで、子どもにとってはハードルが下がる。
- 靴を脱いでくつろげるようなスペースや触って遊べるような物があってもいい。
- 去年の夏、中原中也記念館において太宰さんと中也さんの企画展が開催された。中也さんをアニメ化した缶バッジを販売し、若い人が多く集まった。「あそこでしか手に入らない」というのがSNSで拡散され、くちコミですいぶん来たらしい。

〔後藤構成員〕

- 活字離れが進んでいる。文字ではなく写真にしてくれとか、CGにしてくれとか。文字を、活字を追うことが少なくなった。これも、検討材料か。
- 耳や目の不自由な方が文学に触れる方法を検討してもらいたい。
- 小中学生向けに、教科書掲載の詩や作家の展示も検討の余地あり。
- 子どもたちに文化、文学がいかに大切か。やはり、触れさせ、一度経験させると来る。そういう方法も検討事項。
- 国際化への対応。

〔近藤構成員（座長）〕

- IT技術の導入の必要性を感じる。本市には、ヒューマンメディアセンター、あるいはFAIS（北九州産業学術推進機構）という組織がある。また、十数校の大学がある。情報関係のところにIT技術はある。そういうものを巻き込む形で。
- 小中学生の来館については、教育委員会を巻き込む形。地域を学ぶ主体的な取り組みが必要。「文学館に来て生の文学に触れる」インリーチ的な取り組み。
- 飲食物を置いていないが、例えば、作家ゆかりの飲食物や衣食住に関する陳列などによって展示に身近な生活という広がりを持たせてはどうか。
- 文学館、図書館、新設される平和資料館などとの連携や回遊性。
- 2階の文学マップはわかりづらい。小中学生、大学生などにモニターさせて、問題箇所洗い出しをしてはどうか。
- 車椅子等の対応も、実地のモニター活動が必要か。小中学生、大学生なども足を運んでもらい、モニターをやりながら、「オウが街のこういう文学館をつくっていくんだ」という参加できる場があればいい。
- 現場で、文化施設の中で会議や懇話会をするのは、非常に意義がある。まさにユニークベニューとしての利用法を検討する。